特　別　講　演　抄　録

パーキンソン病診療の現況

三井良之
近畿大学医学部神経内科学教室

パーキンソン病は神経変性疾患の中でも患者数が多く，高齢化社会とともに有病率は増加の傾向にある．神経変性を抑制する根治的治療法はないが，病態の本質と考えられる脳内のドパミン不足に対して，様々なアプローチがある．基本はL-DOPA補充療法であるが，ドパミンアゴニストも，L-DOPA治療の欠点を補完するものとして重要な位置を占める．日本神経学会ガイドラインにおいては，若年者では，将来生じうる運動合併症の出現を遅らせるために第一選択として位置づけられている．しかし，使用機会が増えるにつれて，その問題点も明らかとなってきており，ドパミンアゴニスト治療のあり方にも見直しの気運が高まっている．特に，2002年，bromocriptineによる心臓弁膜症発症の報告以来，麦角系ドパミン作動薬と心臓弁膜症との関連が注目されるようになった．さらに2007年1月，NEJMにおける麦角薬と弁膜症についての報告を受けて，3月には米国でpergolide市場撤退，5月には日本神経学会から「使用上の注意」が発表された．本研究では，これらの動きが，ドパミン作動薬治療の処方にどのような影響を与えたかを検討した．

対象と方法：対象は2007年5月時点で近畿大学医学部附属病院三井外来に通院中で，麦角系作動薬を内服していた患者20名(カベルゴリン10名：男性4名，女性6名，以下C群，ペルゴリド10名：男性2名，女性8名，以下P群)．上記の使用上の注意を説明後，患者意志を尊重した薬物選択を行った．治療選択の変化を重症度，罹病期間，L-DOPA/DCI内服量，年齢で比較検討した．

結果：C群は継続3名(男性0名，女性3名)，変更7名．P群は継続4名(男性0名，女性4名)，変更6名．継続を選択した患者は若年者に多い傾向($p=0.074$)を認めたが有意差は認めなかった．ただし，bromocriptineへの変更を希望した2名を麦角系継続群として検討すると麦角継続群では有意に若年が多い傾向（$p=0.0136$）を認めた．

考察：麦角系作動薬の継続を希望する人は若年者に多く，非麦角系の眠気が職業や自動車運転に与える影響が考えられた．ドパミンアゴニスト使用に当たっては，麦角系における心臓弁膜症の問題だけはなく，睡眠障害に対するリスクの検討が重要であると考えられた．

有害大気汚染物質の健康リスク評価について

奥村二郎
近畿大学医学部環境医学・行動科学教室

発がん性を含む多様な有害物質が大気中から検出されている．これらの検出された物質の大気中の濃度が将来ヒトに健康影響を生じるレベルであるかが注目される．近年，リスクアセスメントの手法を用いた化学物質や重金属の健康リスク（健康影響）評価が行われるようになり，個々の物質によっては，直ちに健康影響が発生するものではないものの，長期間曝露することにより健康影響が懸念される濃度であることが明らかとなってきている．

本講演では，本日は，有害大気汚染物質対策の健康影響における，健康リスク評価の考え方について概説し，その後，閾値のない物質の代表例としてベンゼンに対する健康リスク評価の手順に沿って紹介する．